

ほっとらいん ふろむ ほんごう

形を変えつつ 40 年続けられてきた生命のリレー 「新宿地域看護業務連絡会 40 周年記念講演」開催

2007 年 11 月 2 日(金)、慶應義塾大学病院(東京都新宿区)において新宿地域看護業務連絡会 40 周年記念講演が開催された。

17 時からの記念講演には勤務を終えた看護師が次々と集まり、会場は瞬く間に空席がなくなった。第一部は宇都宮宏子(京都大学医学部附属病院退院調整専任看護師)氏による「病院と在宅ケアとの連携 看護師の役割」。宇都宮氏が手がけてきた退院支援のプロセスやその目的、注意点などについての講演となった。



続いて第二部ではパネルディスカッション「看護職からみた新宿区地域医療連携ネットワーク構築の可能性」が秋山正子(白十字訪問看護ステーション所長)氏の司会のもと、区内急性期病院における退院調整担当者、訪問看護ステーションや新宿区高齢者サービス課の職員などが出席して行なわれた。病棟側からは「在院日数が短すぎて調整するまもなく患者が退院してしまう」、在宅側からは「医療依存度が軽くても生活しづらい人があることも注意してほしい」と問題提起が行なわれ、やりとりの末、「1000 床を超える大病院では患者の生活が見えづらく、多忙なものわかるが、退院後に生活が可能かどうかを見極めて退院させてほしい」などの意見に収束した。

終了時間が押し迫るなか、宇都宮氏が「退院支援を行なうのは日数を短くするためではなく、患者の生活を考えること」と述べ、秋山氏が「連絡会の設立当時、保健師や助産師を中心とした母子保障から始まった会が 40 年を経過した今、退院調整の課題に直面している。今後も急性期から在宅へとバトンを渡す生命のリレーを続けていかねばと思う」とまとめて、終了を迎えた。